

『岩倉峡流下能力の再検証』その2 .

= (岩倉峡流下能力検討会報告書) と関連して =

‘ 06.2.6

自然愛・環境問題研究所

総括研究員 浅野 隆彦

「岩倉峡流下能力検討会」が、ズサンな資料を与えられ検討を行った事に対し、真の学術的意義が存しない内容であることを、意見書 681 『? 学者が雁首揃え 舟滝を登る』 = 岩倉峡流下能力をめぐるトンデモない検討 = で、具体的に指摘している。

その後、意見書 688 『岩倉峡流下能力の再検証』その1 = 真の流下能力への一つの道 = と題し、全観測データの分析から「最多集中水面勾配」を導き、横断面各所の河道特性を見極めた粗度係数の推定をもって、岩倉観測所地点の「無害流量」(堤防天端 余裕高) 流下能力水理計算を行ない、結果的に $Q = 4457 \text{ m}^3/\text{s}$ (水深 11.72m) $n = 0.0387$ を得た。

上記「検討会」はトンデモない検討ではありながら、報告書 6P. 「3-3 水位・流量関係についての総合判断」に於て、『流量観測値との比較から、 n が 0.030 から 0.045 の間の値であることは明らかであるが、いずれの値とするかは、目的によって、「裁量で決める」としかいいようがない。河川工学者としての立場からいえば、中央値としての $n = 0.0375$ 程度を採用するのが適切と考える。』としている。_____ ラインを付けたところが「検討会」判定の「主文」なのであるが、それにも関わらず、木津川上流河川事務所は $n = 0.045$ にコダワルとしている。「検討会報告書」で「4 過大あるいは過小の水位・流量関係を適用した場合の影響」として、7p ~ 9p にわたって「クドイ」ほど丁寧に上流の危険、下流の危険に大いに影響するから、 n 値採用に『慎重のうえにも慎重を期して検討する必要がある。』と結論づけているにも関わらず、「脳天奇」なのか「バカ丸・・・」なのか判らないが、全く慎重に検討した風もなく、アッサリと最も高い n 値を採用すると宣言しているのである。又、この数値は2年前の「木津川上流住民対話集会」の時点で聞いていたもので、「アイタクチガフサガラナイ」とはこの事である。

〔A〕 $n = 0.03$ の「無害流量」流下能力。

$$= \frac{1}{0.03} \sqrt[3]{\left(\frac{AT}{ST}\right)^2 \sqrt{0.0022}} \quad 33.3 \sqrt[3]{\left(\frac{1021.3}{149.9}\right)^2 \times 0.047}$$

$$33.3 \times 3.59 \times 0.047 \quad 5.48 \text{ (m/s)}$$

$$Q = A \quad = 1021.3 \times 5.48 \quad 5.597 \text{ (m}^3/\text{s)}$$

{ B } n=0.0375 の「無害流量」流下能力。

$$= \frac{1}{0.0375} \times 3.59 \times 0.047 \quad 4.5 \text{ (m/s)}$$

$$Q = 1021.3 \times 4.5 \quad 4596 \text{ (m}^3\text{/s)}$$

{ C } n=0.045 の「無害流量」流下能力。

$$= \frac{1}{0.045} \times 3.59 \times 0.047 \quad 3.75 \text{ (m/s)}$$

$$Q = 1021.3 \times 3.75 \quad 3830 \text{ (m}^3\text{/s)}$$

上記の計算は岩倉観測所第1断面から第2断面へ水深11.72mで1/455の水面勾配をもって流れる時の流下能力で、n値各々で検算してみた。

現在のところ、「岩倉峡流下能力」の真値に「絶対の根拠」は見えていない。しかし、昭和48年からの実際観測データを誤差と共に十分認識し、学ばなければならない。その点「検討会報告書」の結論が『n値0.03から0.045の間であり、n=0.0375程度を採用することが適切である』としている根拠が『流量観測値から見てn値が0.03~0.045の間に収まっていることが明白である』とした判断は先ず妥当と言える。

上記計算のように、n=0.03 { A } と n=0.045 { C } の違いには、1767 m³/s もの洪水量が立上る。n=0.0375 { B } にしておけば、1001 m³/s に軽減する。{ C } との違いも766 m³/s と少ない。この方が両方への対処が容易であることは自明の筈であろう。「しかあーし」カタクナにn値0.045を採ると言う。

では仕方がない、胸の裡を推察してみよう。

n値0.0375を採用すると、「無害流量」流下能力が約4600 m³/sとなり、上野遊水地でさえ不要であった事実がバレルからである！ 今になってダム治水不要、上野遊水地不要では関係者から袋叩きにされかねない！ 国土交通省の体面を保てない！ そんな嘘は、もう、大々先輩の責任にして、国民に対し素直に向き直そうよ。